

現代日本における中国出身留学生の将来設計に関する一考察
An Analysis of Chinese Students' Life Plans in Contemporary Japan
馬文甜 (筑波大学大学院)
MA Wentian (Graduate Student, University of Tsukuba)

キーワード：在日中国人 留学生 将来設計

本研究の目的

本研究の目的は、現在において過半数を占め、また今後ともプレゼンスの拡大が見込まれる日本での中国出身留学生の卒業・修了後の将来設計／進路選択に着目し、その要因を検証することである。本研究は、特に中国人留学生が多様な背景・属性を持つことに留意し、現代における在日中国人留学生の実態や意識、また、彼（女）らが置かれた経済社会的環境を深く理解するための基礎研究になることを目指している。

研究背景

2014年5月時点で、日本における外国人留学生の総数は約14万人である。そのうち、中国出身の留学生は約56%であり、昨今は全体における割合を低下させつつも、依然として過半数を占めている。近年、世界に向けて多数の留学生を送り出し続けてきた中国では、「海帰」（帰国留学生）の数も急増しつつある。中国の顕著な経済発展に応じて留学後に帰国しようとする1990年代生まれの中国人の若者の意志の高まりとともに、帰国留学生の就職難が社会問題として注目を集めている。

広大な国土をもつ中国からの留学生の背景は様々である。複数の要因が、日本での就職を含む本人のキャリア選択・戦略の方向性に影響を与えられられる。日本における留学生に関する研究の多くは、留学生の受け入れ政策、異文化コミュニケーション、留学後の雇用問題などを主要なテーマとしていた。具体的には、留学生の受け入れ政策の変遷と政策の効果、留学生の大学生活や学業への適応の困難さ、留学生への就職支援や雇用管理上の問題点を分析した研究蓄積が積み重ねられている。一方、中国人の日本への留学やその後のキャリア形成などを含む将来設計については、「永続的ソジョナー」としての中国人（坪谷2008）や、近年では戴（2012）の分析が重要である。ただし両者は、上に述べたような中国人留学生の多様な属性について、十分に吟味しているとはいえない。こうした事情を考慮した包括的な研究が必要であると思われる。

今後、日本社会は、留学生をさらに多く受け入れることが予想される。一方で中国社会も、急増する帰国留学生とどう向き合うべきかという問題に直面することになる。こうしたことから、中国人留学生の内面的な意識や彼（女）らを取り巻く状況を、その変化とともに明らかにすることは重要な課題といえるだろう。

調査概要

報告者は、2013年6月～2014年9月にかけて、中国人留学生に対しインタビュー調査及びアンケート調査を実施し、それぞれ16名および351名から回答を得た。アンケート調査の結果は、41%の中国人留学生が帰国を希望している一方、引き続き日本での滞在を希望しているものは52%であることを示している。

前者については、故郷に近い都市に就職ができること、親孝行などが理由として多

く挙げられ、後者については、日本の環境を好むものや、日本での勤務経験を求めるものが回答数の上位にのぼった。永住資格を欲するものの多くが、それが日中間の移動に便利であるためと回答している点にも留意が必要である。

さらに本調査は、出身地、性別、配偶者・恋人の有無、一人っ子か否かという要因と将来設計との関係を考察している。日本に定着を希望する中国人留学生の理由には、一定の地域差がみられた。大都市出身者は、日本社会や文化に対する個人的な好みや環境を理由として挙げることが多く、地方出身者が挙げる日本の賃金水準に必ずしも魅力を感じているわけではない。一方、男女差や配偶者・恋人の有無も、日本での定着傾向に作用している。特に、配偶者・恋人のいない女性の帰国志向は強い。なお一人っ子については、通説とは異なり、帰国志向よりも定着志向が強いことが、少なくとも本調査により明らかにされた。また、並行した実施したインタビュー調査により、中国人留学生の将来設計に関する質的な側面を探った。仕事やキャリアに関する環境や精神的な満足度なども、中国人留学生の将来設計に影響していることが考えられる。

本調査の結果を踏まえると、在日中国人留学生の将来設計は、以下の五つのグループに整理することができる。第一に、日本で学業を終えた後、すぐに帰国し、故郷に就職するグループである。第二に、帰国はするが、故郷には帰らず、他の都市に就職するグループである。第三に、卒業後・終了後、一定期間は日本にいるが、勤務経験を積んで帰国するグループである。このパターンは、日本に滞在する期間を3年以内としているところに特徴がある。第四に、日本に引き続き残るが、滞在予定年数や永住資格の希望については明確なビジョンを持っていないグループである。第五は、永住のために永住資格を希望し、人生の残りを日本で過ごしたいという考えを持つグループである。上に述べたように、出身地、性別、配偶者・恋人の有無、一人っ子か否かといった要因は、程度の差はあるが、中国人留学生の将来設計に作用し、その多様性に寄与しているのである。

今後の課題と展望

本研究は、多くの課題を残している。まず、既存の研究にもとづいた出身地・地域の分類方法は、中国の近年の経済発展を考えると、限界があるように思える。以前のような「東部は豊か、西部は貧しい」という地域経済の特徴は薄まっているからである。同じ地域であっても、都市を中心に経済圏が形成されつつある。経済発展や雇用機会あるいは賃金水準といった観点から、別の類型および調査方法を考え、中国人留学生の出身地と将来設計の関係性を考察する必要があるだろう。

また本研究において実施した調査は、日本で学ぶ中国人の進路選択に関する意識・認識に焦点を当てたものである。日本で学業を修めた後の中国人留学生の実際の進路には踏み込んでおらず、希望、期待、計画と現実が一致するかどうかについて、分析の余地を大に残している。今後、理想と現実の間に横たわるギャップについても念頭に置きつつ、日本で学ぶ留学生の将来設計とその実態について幅広く究明する必要があると考えている。

参考文献

- 戴二彪, 2012, 「中国人の国際移動の新段階: 頭脳流出から頭脳循環へ」, 『新移民と中国の経済発展 (ICSEAD) 研究叢書』第9巻, 多賀出版
- 坪谷美欧子, 2008, 『永続的ソジョナー中国人のアイデンティティ—中国からの日本

『留学にみる国際移民システム』，有信堂
独立行政法人日本学生支援機構，2014，「平成 26 年度外国人留学生在籍状況調査結果」